

無防備運動に寄せる私の思い

四條畷市 高橋 爾さん

私は、大阪府四條畷市に在住し、地域で自立生活を営む脳性マヒ障害者の介護活動に学生時代から関わっています。その介護活動の中で、障害者が差別される世の中で、健全者も生きにくいのではないのか?という問いを常日頃投げかけられてきました。

そして、自分自身の生い立ちを掘り起こしたりしながら、障害者を差別してきた(る)自分や、しかしその一方で例えば能力主義という価値観によって自分自身も抑圧してきたのではないかと、いつ「気づき」が得られてきたかと思っています。

介護というものは、障害者の「お世話」をする行為やサービスとしてだったり「やってあげる」というようなものではなく、自己変革や分断されてきた障害者と健全者が連帯していく営みであると感じています。

しかしながら、「戦争」は、障害者と健全者との関係を、より切り裂くものとして機能します。ナチスの例をひくまでもなく、障害者は戦争によって強

化された優生思想によって、虐殺されてきました。そして、その抹殺に加担させられ、或いはそれを拒否すれば自らの生命に危険が及ぶという状況が過去にあったのだというのを忘れたくありません。

障害者との関係を結びなおそうとする介護活動そのものですら否定される危険性もあるでしょう。目の前の障害者の首を絞めることを強要される。拒否すれば自分が死ぬ。そのような事態を想定するとき、いまの流れと、いつかは到底看過できないものとして自分に迫ってきます。戦時下、戦争に加担し障害者を殺す自分にはなりたくありません。

「なんとかしたい、なんとかしなければ、でもどうすれば...」そのような思いを抱いていたときに出会ったのが、まさに無防備運動だったと言えます。約3年前になるでしょうか。大阪市桃谷駅で降りた私は、署名活動する人に出会いました。その署名は「大阪市戦

争非協力 無防備地域宣言」の条例制定を求める署名でした。「この条例ができれば、戦争に協力しない街になる。」との声でした。

折りしも、イラク戦争の終結が見られない中、日本では、自衛隊が派遣された年だったと思います。戦争ができる国へ、その準備が着々と進められていくことへの焦りを感じながらも、何もできていない自分がいました。「この運動は、大阪市民だけの安全をめざすものではありません。また、戦争を前提にしたものでもありません。無防備地域宣言をする自治体を全国に増やすことで、日本の世界の軍事政策を平和へと転換するための市民の意思表示です」そのように、署名員の方はおっしゃいました。私にも、自分の足元でできることがある、そうした展望をこの無防備運動は示してくれました。

四條畷市での具体的な取り組みはまだつづけていませんが、今後、私につながる仲間とともに、一人ひとりの声を丁寧を集め、その声が反映されるような市民自治と共生のまちづくりをめざしていきたいと思っています。

ません。この大多数のひとたちとの間のギャップをどのように埋めていけるのか、わたしたちの前には大きな課題が横たわっているのが現実ですが、そのギャップを埋め、対岸に橋を架けてどれだけ多くの人にこちら側に渡ってきてもらおうかがこの運動の本質的な意味でしょう。これこそが苦勞するところでもありますが同時にこの運動の面白さ・やりがいでもあるでしょう。

わたしたちはきつとこれらのすべてを味わいながら次なるステップへと成長していくと信じています。



四條畷市ホームページ